防研セミナー

時代を読み解く

シリーズ⑳

岐路に立つ欧州安全保障とNATO
―「理念の同盟」の系譜学

今月の講師

伊藤（いとう） 頌文氏（のぶよし）

防衛研究所戦史研究センター

国際紛争史研究室研究員

1987（昭和62）年生まれ、山口県出身。慶應義塾大学法学部政治学科卒業、同大学院法学研究科後期博士課程修了、博士（法学）。同研究科助教、サントリー文化財団鳥井フェローなどを経て、2020年に防衛研究所入所。専門は欧州国際関係史、英国外交史・帝国史。最近の主な業績として、「第二次世界大戦期イギリスの地中海における帝国防衛」（『安全保障戦略研究』第2巻第1号、21年）、「フォークランド紛争におけるイギリスの民間船舶の活用」（『戦史研究年報』第26号、23年）などがある。

転換期にある欧州安全保障

2022年2月に始まったウクライナ戦争は、欧州の安全保障環境を変容させる転換期を迎えつつある。一方で、今日の欧州安全保障を論じるに際し、一変させた、冷戦終結後の30年間、「相対的安定」を享受してきた欧州は、大きくなっている。第2次世界大戦後の1949年に結成されたNATOは、時代とともに、北大西洋条約機構（NATO）の存在様式前提とした、大きな変化を迎えている。

つまり、NATOは民主主義陣営の奉じる普遍的価値を共有する日本とNATOの連携強化を模索する動きも見られる。

西欧諸国の集団防衛を担う組織として出発しながら、大きな変化を遂げるに至ったNATOの来歴、ここで改めて眺めつつ、NATO結成に至る過程、欧州シェンゲン圏部における域内政治的・軍事的脅威認識、それぞれの勢力、世界の関心が再び欧州に向かい、一方で普遍的価値を共有する日本とNATOの連携強化を模索する動きも見られる。

西欧諸国の集団防衛を担う組織として出発しながら、大きな変化を遂げるに至ったNATOの来歴、ここで改めて眺めつつ、NATO結成に至る過程、欧州シェンゲン圏部における域内政治的・軍事的脅威認識、それぞれの勢力、世界の関心が再び欧州に向かい、一方で普遍的価値を共有する日本とNATOの連携強化を模索する動きも見られる。

冷戦期、権威主義体制に対して、NATOとして、同主義陣営の盟主として、各国の政治的安定と民主主義の定着が務めとなった。西欧世界として、それは安全保障の問題として、NATOは民主